

# 赤ちゃん絵本の対象年齢について

—ものづくり的理解から物語理解へ—

柴村 紀代・清水 貴子

藤女子大学 人間生活学部 保育学科 札幌あかしや幼稚園

## 1. はじめに

1998 年 4 月、札幌市中央図書館えほん研究会<sup>1)</sup>は赤ちゃん絵本の調査書『アンケートから見えてきた赤ちゃん絵本 226 冊』<sup>2)</sup>を出した。その中で、1996 年 1 月に絵本を出版していると思われる国内の出版社 73 社にアンケート調査を実施した。その回答社 42 社 (回答率 57.5%) のうち、赤ちゃん絵本を出版している社は 15 社だった。下記の表はその設問のなかで、赤ちゃん絵本の対象年齢についての解答を表にしたものである。

＜設題＞赤ちゃん絵本の対象年齢をどのように設定していますか。

・ 0 歳～1 歳未満 (1 社)・ 0 歳～2 歳 (1 社)・ 0 歳～3 歳 (3 社)・ 6 ヶ月～2 歳 (1 社)・ 6 ヶ月～3 歳未満 (3 社)・ 10 ヶ月～1 歳4 ヶ月 (1 社)・ 10 ヶ月～2 歳6 ヶ月 (1 社)・ 10 ヶ月～2 歳10 ヶ月 (1 社)・ 1 歳～3 歳未満 (1 社)・ 1 歳～3 歳 (2 社)

この回答例でもわかるように、出版社が考えている赤ちゃん絵本の対象年齢は、上限、下限ともかなりのばらつきがある。えほん研では、赤ちゃん絵本を調査するにあたって、「赤ちゃん」という呼称の範囲を、0 歳児から 3 歳児未満とした。この根拠は、厚生省の保育所設備基準の職員数が「3 歳未満児はおおむね 6 人に 1 人以上、3 歳児はおおむね 20 人に 1 人以上」と最低基準を設けていることから、3 歳児からは集団生活が可能であり、集団の読み聞かせができる幼児絵本への移行を 3 歳児からと考えた。この設定は、ちょうど 1995 年 4 月から福音館書店が赤ちゃん向け月刊誌の対象年齢を 3 歳未満児として「こどものとも 0. 1. 2.」を出したこととも重なり、現在、一応の認識をえていると思われる。

しかし、3 年に渡る調査を終え、『赤ちゃん絵本 226 冊』の冊子にまとめたとき、0 歳児と 2 歳児とにはかなり大きな違いがあり、特にことばを話し始める前と後では、行動にも物事の理解にも大きな差がでてくる。絵本においては、最初のものづくり絵本から幼児向きの簡単な物語絵本までのあいだは、かなりの段差があることに気づかざるをえなかった。そこで、本研究は、現在、赤ちゃん絵本と言われている絵本のなかから、ものづくり絵本と物語絵本を区別し、それぞれの絵本を読み聞かせた子どもの反応を、柴村は『赤ちゃん絵本 226 冊』のアンケート結果から、共同研究者の清水は修士論文『赤ちゃん絵本の読み聞かせに関する一考察—アンケート調査と事例研究を通して—』<sup>3)</sup>と、その後の VTR 撮影による赤ちゃんの反応分析から赤ちゃん絵本の対象年齢について考察した。

## 2. ものづくり絵本について

ものづくり絵本とは、柴村が『赤ちゃん絵本 226 冊』のテーマ別分類において使用したことばだが、1 冊の絵本に連続したつながりがなく、ページを開くごとに一つのものが描かれており、絵に対応したものの名前が付けられているものをさす。描かれた「もの」が、あいいうえお順に並んだものが「あいいうえお絵本」、「もの」の順序がばらばらなものが「これなあに絵本」と名づけられている例が多い。使われる「もの」は、子どもの身近なものが多く、そのカテゴリーのくくり方によって「おもちゃ」「くだもの」「どうぶつ」など、幅広い絵本が出版されている。なお、この分類に「いないいないばあ絵本」をふくめているが、これは、「いないいない」と「ばあ」の 2 場面展開で、1 冊の絵本としての連続性はないということから、この分類に入れている。

事例1 (データ柴村)

『赤ちゃんにおくる絵本』 とだこうしろう 絵・のろさかん 詩

戸田デザイン研究室 1989年

| 年齢  | 性 | 子 | アンケートから   |
|-----|---|---|---|
| 0.9 | 女 | ◎ | <ul style="list-style-type: none"> <li>一つひとつに手をたたいたり、体を上下したりして喜んでた。</li> <li>短いことばと見やすい絵で楽しいようです。</li> </ul>  |
| 1.0 | 女 | ○ | <ul style="list-style-type: none"> <li>3歳になる兄が読んでくれた。読み始めると自分でめくりたがる。</li> </ul>  |
| 1.3 | 男 | ○ | <ul style="list-style-type: none"> <li>早く次のページをめくってほしいようにする。</li> <li>眠たくなると必ず本を持ってくる。この本も何度か持ってきた。</li> </ul>  |
| 1.5 | 女 | ◇ | <ul style="list-style-type: none"> <li>ちょうど今、ことばをたくさん覚えてくれる時期なので、うちの子にはとてもよい本だった。</li> <li>一生懸命まねして声を出していた。</li> <li>自分でページをめくっては指をさし、ムニャムニャ言っていた。</li> </ul> |
| 2.9 | 女 | ◇ | <ul style="list-style-type: none"> <li>絵がシンプルで赤ちゃんから楽しめる。</li> <li>1歳くらいには少し長すぎる。</li> <li>「もくば」「ゆりかご」「おりづる」「だるま」は赤ちゃんにはなじみがない。</li> </ul>                    |

この絵本は、ものづくり絵本の典型的絵本で、右ページに「もの」、左ページに「もの」の名前が全60ページ中28種類描かれている。

アンケート結果から9ヶ月で反応が顕著にでる。1歳5ヶ月児では、言葉を覚え始めた時期なので、この「ものづくり絵本」がちょうど適切だったとある。年齢が進むにつれて◎大好きから、◇興味ありに変わっている。2歳9ヶ月では、絵本が単純すぎるように思えたが、「自分で〜ムニャムニャ言っていた」とあるように、自分で読む楽しみ方をしていることがわかる。

事例2 (データ柴村)

『ブルーナのこれなあに』 〈ブルーナの1歳からの本〉 ディック・ブルーナ 絵

講談社 1994年

| 年齢   | 性 | 子 | アンケートから  |
|------|---|---|--|
| 0.7  | 男 | ○ | <ul style="list-style-type: none"> <li>自分の知っているものに反応を示す。</li> <li>赤ちゃんの絵本にふさわしい。</li> </ul>            |
| 0.5  | 女 | ◎ | <ul style="list-style-type: none"> <li>よく読んでいる本。</li> <li>かわいらしく、色もあざやか。</li> <li>身近な題材がいい。</li> </ul> |
| 2.11 | 男 | △ | <ul style="list-style-type: none"> <li>今は1歳の頃と違って興味が無い。</li> </ul>                                     |

「ブルーナのこれなあに」これも「もの」だけがくっきりと描かれている。2歳5ヶ月で◎だが、読んでもらうのではなく、自分で手にとって、声に出して読んでいる。2歳11ヶ月では△で興味なし。年齢的にはもう「ものづくり」を卒業している例。

事例3 (データ柴村)

『いない いない ばあ』 〈松谷みよ子あかちゃんの本〉 松谷みよこ 文／瀬川康男 画

童心社 1967年

| 年齢  | 性 | 子 | アンケートから   |
|-----|---|---|---|
| 1.0 | 女 | ◇ | <ul style="list-style-type: none"> <li>「いないいないばあ」と言うと自分でもやりだすが、本に対しては興味なさそう。</li> <li>絵や内容も好きです。(親)</li> <li>親の好きな本と子どもの好きな本は違うなあと感じました。</li> </ul> |
| 1.3 | 男 | ◎ | <ul style="list-style-type: none"> <li>とにかく大好き。見ている時は真剣な顔で、「ばあ」の部分ではホッとしたりするようにニコリ。何回も読んでいるのにどうしてあきないのか不思議です。</li> </ul>                            |

|      |   |   |   |
|------|---|---|---|
| 2. 8 | 女 | ◎ | <ul style="list-style-type: none"> <li>一緒に「いないいないばあ」をやっています。</li> <li>最後の女の子のところが残念。ページをめくって「ばあ」をしたほうがいいと思う。</li> </ul> |
|------|---|---|---|

「いないいないばあ」は、生後6ヶ月頃から世界各地で行われる典型的なあやし遊びで、これは、人間の「ワーキングメモリー」という、前に起きたことを記憶しておく機能が働きはじめたことを示しているという。<sup>4)</sup>

アンケートからは、1歳0ヶ月で、すでに自分で「いないいないばあ」ができる年齢になっているが、本に対しては興味がない。という反応だった。

1歳3ヶ月で◎、とにかく大好きとある。2歳8ヶ月も◎で絵本と一緒に「いないいないばあ」をやっている。とあり、年齢が高くても興味を持っていることが伺える。

#### 事例4 (データ清水)

『いないいないばあ』 (松谷みよ子あかちゃんの本) 松谷みよこ 文/瀬川康男 画  
童心社 1967年

| 年齢    | 性         | 読み手 | ビデオから   |
|-------|-----------|-----|---|
| 1. 1  | A児<br>(男) | 母   | <ul style="list-style-type: none"> <li>お母さんの膝でじっと見ている。</li> <li>絵の方向に首を動かす。</li> <li>最後にのんちゃんを指さす。</li> </ul>   |
| 1. 10 | B児<br>(女) | 母   | <ul style="list-style-type: none"> <li>読み手と一緒に「いないいないばあ」と言う。</li> <li>声を出して笑う。</li> <li>「ねこです」「くまちゃん」など出てくる動物の名前を言う。</li> <li>読んでいる途中、読み終わると「もっかい」(もう一回)と言う。</li> </ul> |
| 2. 11 | C児<br>(女) | 母   | <ul style="list-style-type: none"> <li>ねこが出て来たら拍手して、ねこを食べる真似をした。</li> <li>絵本と一緒に、手で顔をかくして「いないいないばあ」をした。</li> <li>くまのところ、近くにあったくまのぬいぐるみを持って来た。</li> </ul>                |

1歳1ヶ月で、絵本を見ているという認識がある。めくると、絵の方向に首を動かすことで、絵を注視していることがわかる。

1歳10ヶ月では、上にお姉ちゃんがいて、言葉はすでに達者に使っている。反応も良く、「ねこです。」「くまです。」など出てくる動物の名前を言いながら、楽しんでいる様子が伝わってくる。

2歳11ヶ月は、一般的には赤ちゃん絵本を卒業する頃だが、自分で「いないいないばあ」をしたり、絵本の中のぬいぐるみを持ってきたりと積極的に赤ちゃん絵本を活用している様子が見られる。

以上の事例から、ものづくり絵本は、0歳児の赤ちゃんの最初の絵本として十分に機能していることがわかる。このものづくり絵本の特徴的なことは、どのページを開いても、そのページのものを指さしたり、名前を言ったりしてあげることで、自分で絵本を開きたがる子や途中であきてしまう子にもそのまま対応できる良さがある。「絵本場面における母親と子どもの対話分析」<sup>5)</sup>では、「What型質問は絵本を使用し始めた時からみられ、Which型質問と共に1歳台で代表的な質問だった」とある。母親の質問の内、What型質問はものづくり絵本でもっとも多く使われる。赤ちゃんにとって初めての絵本は、ページを順にめくる本としての機能より、開いたり閉じたりするおもちゃと同じような存在である。そこにももの絵があり、ものと名前との一対一対応を自然に覚えて行くのに適切な絵本と言えよう。

又、「ものづくり絵本」における「いないいないばあ絵本」は、ブックスタート<sup>6)</sup>においても、赤ちゃん絵本の代表的存在として使われている。清水の修士論文においても「いないいないばあ絵本」が、赤ちゃん絵本の典型例として使用されたが、それは「いないいないばあ絵本」は遊びの要素が強く、母子相互作用がよく見られる点からである。その後の福岡の『『いないいないばー』絵本の一考察」<sup>7)</sup>でも「『いないいないばー』遊びや絵本の読み聞かせは、乳児の情緒の分化を助け、乳児と大人との愛着関係が形成される。」と述べられているなど、積極的に「いないいないばあ絵本」の0.1歳児保育への使用が報告されている。

今回の調査では、ものづくり絵本が単にことばを覚えはじめる1歳半前後までではなく、年齢とともにその年齢なりの享受の仕方がされていることがわかった。

清水データにおける1歳10ヶ月のB児が「いないいないばあ」を楽しむと同時に「ねこです。」「くまです。」と出てくる動物の名前をあてるゲームは、「いないいないばあ」の遊びを楽しみつつ、ものづくり的楽しみ方も合わせて行っている。それ以前の子どもの反応では、「いないいないばあ」を楽しむだけで、動物の区別までは思い到っていない。1歳10ヶ月のB児の場合はその両者を楽しむ様子が見られる。又、2歳11ヶ月では、ねこを食べるまねや「くま」のところにくまのぬいぐるみを持

ってくるという発展形が見られる。

ものづくり絵本は、赤ちゃんの初めての絵本として0.1歳児が中心と思われてきたが、実際の赤ちゃんの反応を見てみると、2歳児でも十分楽しんでいることがわかる。

現実には0歳児の下の子に「ものづくり絵本」を読んでやっているとき、上の兄、姉が興味を示す例は多い。

又、一貫したストーリー性があるかないかで「ものづくり」と「物語絵本」に分ける場合、この他にも2場面展開の『おんなじおんなじ』や『おおきいちいさい』など、ものの大きさの違いや、比較などに使われる例も多い。

### 3. 物語絵本について

物語絵本とは、絵本の出だしから終わりまで一貫したストーリーのある絵本をいう。一般的に絵本といえば、物語絵本を指すほど、『ノンタン』でも『11匹きのねこ』でも、『ぐりとぐら』でもみな、主人公が何らかの行動を起こし、その行動の結果が完結されるまでが描かれる。そのため、物語絵本は3歳以上の幼児絵本からという認識が強いようだが、赤ちゃん絵本の中でも物語絵本に分類される絵本は多い。

そこで、赤ちゃん絵本の中でも物語絵本の理解は何歳頃から可能かに注目してみた。

#### 事例5 (データ柴村)

『のせて のせて』 (松谷みよ子あかちゃんの本) 松谷みよ子 文/東光寺啓 絵  
童心社 1969年

| 年齢   | 性 | 子 | アンケートから   |
|------|---|---|---|
| 1. 0 | 女 | △ | ・ この本は、あまり興味を示さなかった。  |
| 1. 3 | 女 | ◇ | ・ 絵はかわいくほのぼのとしているが、色が暗い。  |
| 1. 9 | 男 | ○ | ・ 家にあつて何度も読んでいた本なので、いつもどおりに見てくれた。<br>・ 「ストップ」と言う前に「あぶない」と言っている。   |
| 2. 2 | 女 | ○ | ・ 動物がどんどん一緒に乗っていくのが楽しいみたいだ。2回目からは、うさぎが座る場所を移動し、くまが座ることをしきりに言っていた。 |
| 2. 2 | 男 | ○ | ・ 車をみて「ブーブー、ここここ」と言って持ってくる。                                       |
| 2. 2 | 女 | ○ | ・ 最後のところで遊園地に行くことがわかってから、最後のページを見たがる。                             |

この絵本は、主人公のまこちゃんが運転する本物の赤い自動車に、「ストップ、のせてのせて」と手をあげる動物たちを次々と乗せて行くストーリーである。最後にトンネルをくぐって遊園地に向かう一貫したストーリー展開があるが、動物たちが乗って来るところは、単純な2場面展開で、シリーズ名が〈松谷みよ子あかちゃんの本〉とあるように、物語絵本としては簡単な構成になっている。

しかし、1歳0ヶ月では、興味を示さず、まだ、ストーリーを理解していない。1歳9ヶ月で、車の前にとび出した動物に「あぶない」と積極的に自分の意見を言っている。2歳台で、この物語絵本を十分享受していることがわかる。

#### 事例6 (データ清水)

『のせて のせて』 (松谷みよ子あかちゃんの本) 松谷みよ子 文/東光寺啓 絵  
童心社 1969年

| 年齢   | 性         | 読み手 | ビデオから  |
|------|-----------|-----|--|
| 1. 8 | 男<br>(D児) | 母   | ・ うさぎを指さす。<br>・ しっかり絵本を注視している。   |
| 2. 8 | 女<br>(E児) | 母   | ・ ブブーとハンドルを回す真似。<br>・ 「のせて」で手をあげる。<br>・ 「ストップ」「チュ、チュ、チュ、チュ」と自分でも言う。<br>・ トンネルのところで指をさして、「おうちのトンネルだ。」と言う。 |

1歳8ヶ月は十分絵本を見る体制にはなっているが積極的反応はまだ出て来ない。「うさぎ」のページでうさぎを指さすことから、ストーリーの理解よりも、ページ毎の絵に反応する「ものづくり絵本」のときの理解のように思われる。2歳8ヶ月になると自分が主人公になりきってハンドルをまわした

り、手をあげたり of 積極的な物語参加が見られる。トンネルを「うちのトンネルだ」と言ったのは、トンネルの出口が家の形に見えることからの発想で、自分なりの発見が見られる。

事例7 (データ清水)

『ぞうくんのさんぽ』

〈こどものとも傑作集〉なかのひろたか 作/絵

なかのまさたか レタリング

福音館書店 1979年・こどものとも 1968年

| 年齢   | 性         | 読み手 | ビデオから  |
|------|-----------|-----|--|
| 1. 8 | 男<br>(D児) | 母   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ かばが出てくると指をさして「かあー、かあー」と何回も大声で叫ぶ。</li> <li>・ 先が気になって自分でめくろうとする。</li> <li>・ 「どぼーん」のところで、ページを指さしながら「あー」と言う。</li> </ul>   |
| 2. 8 | 女<br>(E児) | 母   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「ぞうくんのさんぽ」と読むと、「わにくんのさんぽ」と言った。</li> <li>・ 「ママ、わにかな」「ぞうさんだ」「のぼれるんだよ」などたくさんしゃべる。</li> <li>・ 「ぞうくんはちからもち」のところで手を叩く。</li> <li>・ 動物が積み重なったところで「たおれる。」と叫ぶ。</li> <li>・ 全体にこの絵本に興味を持ったようだ。</li> </ul> |

この絵本は、福音館書店の「こどものとも傑作集」に入っており、赤ちゃん絵本として出版されたわけではない。しかし、ぞうの上にかば、かばの上になつと次々と出会ってはぞうの背中に乗って行く展開の仕方は、「のせて のせて」と同じく2場面展開で赤ちゃんでも十分に理解できる絵本だ。

1歳8ヶ月のA児は、かばが出てくると「かあー、かあー」と叫ぶところから動物づくりの絵本理解のように思われるが、先が気になってめくろうとするところから、ストーリーを追っていることがわかる。2歳8ヶ月児になると、完全に物語を理解し、事件が起きる前に予測することができている。

事例8 (データ柴村)

『ぞうくんのさんぽ』

〈こどものとも傑作集〉なかのひろたか 作/絵

なかのまさたか レタリング

福音館書店 1979年・こどものとも 1968年

| 年齢    | 性 | 子 | アンケートから  |
|-------|---|---|--|
| 1. 10 | 女 | ◎ | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 文章にリズムがあつて読みやすし、動物の表情もいいですね。</li> </ul>   |
| 2. 6  | 女 | ◎ | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「いいてんき」と書かれた絵を見て、でも背景の点々模様が不思議「これ、雨降っている」と子どもが言っていた。</li> <li>・ 子どもには覚えやすい文章だったのでよかった。</li> </ul> |
| 2. 8  | 男 | ○ | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 散歩が好きなので「散歩、散歩」と言つて自分でも参加していた。</li> </ul>   |
| 2. 11 | 女 | ◎ | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 単純なお話だがくり返しがあり、視覚的にも積み重なっていく楽しみがある。</li> </ul>  |

2歳台で、十分にこの絵本を楽しんでいる様子がわかる。絵のバックに霧のような細かい点が描きこまれているのが、2歳6ヶ月児が指摘するように雨降りにも見える。「きょうは いいてんき」とある文との不整合を感じる判断力が伺える。

事例9 (データ柴村)

『ねないこだれだ』

〈いやだいやだの絵本〉せなけいこ 作/絵

福音館書店 1969年

| 年齢   | 性 | 子 | アンケートから   |
|------|---|---|---|
| 1. 5 | 女 | ◇ | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 部分的に好きなのところがあつたようで、自分で開いて見ていた。</li> <li>・ ねこの「にゃー」ということばを覚えた。</li> </ul> |
| 2. 7 | 男 | ◇ | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 暗いところが意外と平気だったのに「おばけがいる？」と聞いてきたりする。弟にも「おばけだぞ」と言つて本を見せていた。</li> </ul>     |

|        |   |   |   |
|--------|---|---|---|
| 2. 1 1 | 女 | ◇ | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「ふくろう」と「みみずく」の名前を覚えた。ほかの本にも出てくると「おなじだね」と言って見ていた。</li> <li>・ 母自身も昔に読んだ記憶があり、おばけが怖かったのを覚えている。</li> </ul> |
|--------|---|---|---|

1969 年の出版以来、「おばけの絵本」として人気の高い絵本。1 歳 5 ヶ月は、ねこの「にゃー」ということばを覚えた。2 歳 1 1 ヶ月では、同じ「もの」の名称でも、他の本との共通点を指摘している。

#### 事例 10 (データ清水)

『ねないこだれだ』 (いやだいやだの絵本) せなけいこ 作/絵  
福音館書店 1969 年

| 年齢   | 性          | 読み手 | ビ デ オ か ら   |
|------|------------|-----|---|
| 1. 8 | 男<br>(D 児) | 母   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「とけい」のページで、「とけい」と言う。</li> <li>・ ふくろうの絵を指さす。</li> <li>・ 先に読み進めても「とけい」のページに戻そうとする。</li> </ul>  |
| 2. 8 | 女<br>(E 児) | 母   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「これ読む？」と聞くと表紙を見て「えー、やだー。」「おばけちゃん」と表紙を指さす。</li> <li>・ 途中で席を立ってしまう。落ち着きなくうろつきまわる。</li> <li>・ おばけの絵の所で目をそむける。</li> <li>・ 「やだ。」を連発する。</li> </ul> |

1 歳 8 ヶ月は、部分的に「とけい」や「ふくろう」を指さす。特に「おばけ」について怖がる様子は書かれていない。2 歳 8 ヶ月は、明らかに「おばけ」を怖がっていた。いつから「おばけ」という存在を怖がるのかは明らかではないが、2 歳を過ぎると抽象的な「おばけ」の概念を自分で想像し、それを怖がるという認識が育っていることがわかる。

#### 事例 11 (データ柴村)

『ちびゴリラのちびちび』 ルース・ボーンスタイン 作 岩田みみ 訳  
ほるぷ出版 1978 年

| 年齢     | 性 | 子 | ア ン ケ ー ト か ら   |
|--------|---|---|---|
| 0. 1 0 | 女 | ◇ | ・ あまり関心がないようだ。少し早かったようだ。  |
| 1. 8   | 男 | ◇ | ・ 興味のある動物が出てくると指さししていた。おもしろかったが、まだ、早かった。                          |
| 1. 8   | 女 | ◇ | ・ 響きがおもしろいようで、「ちびちび、ちびちび」と笑いながら言っていたがストーリーはよくわかっていないようだ。ほのぼのする絵本。 |
| 1. 1 0 | 女 | ◎ | ・ 「ちびちび」と言ったり、動物の名前を言う。わたしも好きな本。                                  |
| 2. 3   | 女 | ◇ | ・ 少し怖がっていた。ほのぼのとした感じがした。  |
| 2. 1 0 | 男 | × | ・ 絵から楽しそうな想像ができないのか、「きらい」と言われた。                                   |
| 2. 1 1 | 男 | ○ | ・ 絵をじっと見て、色々話しかけていた。絵がきれい。  |
| 2. 1 1 | 女 | ○ | ・ 「赤いへび・・・大きいねえ」など色々話しかけて、最後のページはニコニコしている。愛を感じる本が好きだ。             |

この絵本も特に赤ちゃん絵本として出版されたわけではないが、背表紙には「2 歳から」という言葉が書き込まれている。アンケートの反応では、1 歳台ではまだゴリラのちびちびが最後に森のだれよりも大きくなってしまいうストーリーの変化には気づいていないことがわかる。

2 歳 1 0 ヶ月で×がついているのは「きらい」というはっきりした拒否反応を示した例である。この件については、次の清水のビデオ分析でより明確な反応が出ている。

#### 事例 12 (データ清水)

『ちびゴリラのちびちび』 ルース・ボーンスタイン 作 岩田みみ 訳  
ほるぷ出版 1978

| 年齢   | 性         | 読み手 | ビデオから   |
|------|-----------|-----|---|
| 1. 8 | 男<br>(D児) | 母   | ・ 表紙を見せただけで、手で払いのけて嫌がる。読み出しても泣き出す。あきたのかと思ったが「ぞうくんのさんぽ」を手にとると熱心に見ているからあきらかに、この本を嫌っていることがわかった。              |
| 2. 8 | 女<br>(E児) | 母   | ・ 「次、おさる」と持ち出して来たが、表紙の「ごりら」の絵に拒否反応を示す。表紙を見せると逃げ出す。表紙の「この顔が嫌なの」とごりらを指さすと物陰からのぞきながら「うん」とうなずく。絵本は、結局、読めなかった。 |

事例 11 の 2 歳以下は、ゴリラへの好き嫌いがまだ出ていない。事例 12 の 1 歳 8 ヶ月から 2 歳を過ぎるとこれほどははっきり好みが出てくることに驚いた。

#### 4. 物語絵本におけるものづくり的理解から物語理解へ

物語絵本の事例からは、子どもたちの様々な反応が見えてくる。その中で、1 歳代の子どもたちの反応は、事例 6 (1 歳 8 ヶ月)「うさぎを指さす」、事例 7 (1 歳 8 ヶ月)「かばが出てくると指をさす」、事例 9 (1 歳 5 ヶ月)ねこの「にゃー」、事例 10 (1 歳 8 ヶ月)「とけい」など、ストーリーの理解よりも、そこに描かれている「もの」に対する関心に注意が向けられている。すなわち、物語絵本における「ものづくり理解」が 0. 1 歳児の絵本への導入の役割りをはたし、絵本を多面的に理解することを助けていると思われる。

幼児における物語理解が何歳児から始まるかについて、「保育所保育指針」では、「3 歳児の保育内容」として、「簡単な話の筋も分かるようになり、話の先を予想したり、自分と同化して考えたりできるようになる」とある。しかし、実際には 3 歳前にすでに絵本における物語理解ははじまっている。

又、『2 歳児の保育 年齢別保育講座』<sup>8)</sup>では、1 歳半頃で「短い動きを表現した絵本を喜ぶ」「知っている物を指さして、ことばで言う」とあり、この頃はまだ「ものづくり絵本」の段階で、2 歳半頃から「絵本の筋がわかってくる」と物語理解への成長を示している。

古屋の論文「幼児の絵本読み場面における『語り』の発達と登場人物との関係」<sup>9)</sup>において、「子どもの物語世界への関わり」について次のように述べている。

「C 子どもの物語世界への関わり」については、「e 登場人物への語りかけ」と「f 子ども自身と物語世界の融合」の 2 つを合計したところ、絵本 1 (「ひとまねこざる」注 引用者)では、2 歳代から 3 歳代にかけて有意に減少する傾向(直接確立 0.042)が見られた」

これは「2 歳代には『C 子どもの物語世界への関わり』が出現し、3 歳代には代わって『D 子どもの物語内容へのコメント』が出現する傾向にあった」とあるように、これらの発話が、2 歳代では、物語世界への融合を意味し、3 歳代で、物語世界へのより客観的な関わりを意味するところから、2 歳代ですでに物語世界への関わりが十分に行われていることがわかる。

2 歳児の物語理解は、事例 5「のせて のせて」では、2 歳になると事例からも積極的にうさぎとくまの座る場所が違う点を指摘したり、自動車の目的地が遊園地であることを自分から指さすなど完全に物語を理解していることがわかる。

ここで、使用した絵本の内、『ねないこだれだ』と『ちびゴリラのちびちび』についてだが、2 歳 7 ヶ月と 2 歳 8 ヶ月では、あきらかに「おばけ」を意識していた。しかし、『ねないこだれだ』における「おばけ」の存在は「こわい」と意識されつつも、絵本それ自体に拒否反応は示されていない。それに対して『ちびゴリラのちびちび』の事例 11 の 2 歳 10 ヶ月で、×(きらい)という反応と、事例 12 の 1 歳 8 ヶ月の男児が「表紙を見せただけで、手で払いのけたり」する反応と、2 歳 8 ヶ月の女児は、遠くまで逃げ出してしまうというこれらの反応は、物語理解以前の反応だが、かといって、ものと名前をひとつひとつ結びつけて喜ぶ「ものづくり的理解」の段階でもない。これはたまたま極端な出方をしているが、絵本に対する好き嫌いの感情がかなりはっきり出て来ている。絵があることで、まず、ゴリラの絵に拒否反応を示してしまう。そのために、物語に入っていけない。お話だけで、絵がなければ、きっと話を聞いていたのではないと思われる。ただし、はっきりとゴリラを認識し拒否しているかは、1 歳 8 ヶ月男児については不明である。彼の兄が小さい時、テレビのサンコンさんを見て泣いたりしているのも弟も黒いものが苦手なのかもしれない。2 歳 8 ヶ月女児の場合は、はっきりゴリラが嫌いと言っている。ゴリラについての好悪の感情は、ものづくり的理解から物語理解への狭間であって、認識の発達のひとつの隘路として存在しているのではないと思われる。

その他にも親がちょうどいいと思って与えても、子どもが反応を示さないケース、逆に少し早いかなと思ったり、少し幼いかなと思っても、とても気に入って、いつもその絵本をかかえてくる例も多い。

今回、赤ちゃん絵本をものづくり絵本と物語絵本とに分けて、その反応をそれぞれ調べてみたが、やはり、赤ちゃん絵本の対象年齢としては、ものづくり絵本が早く、物語絵本が赤ちゃん絵本の後期に位置づくものではある。しかし、物語絵本がものづくり絵本を完全に理解してから出てくるものではなく、ある時期、物語絵本の中のものづくり的要素の理解の段階を経て、少しずつ物語理解へと導かれることが確認された。

今後の課題として、赤ちゃんの楽しめる絵本とそうでない絵本をどう見分けるか。その要素のひとつとして、物語絵本におけるものづくり的要素の有無や、ものづくり絵本の中の物語的要素の抽出が可能かどうかを考えてみたい。

## 注

- 1) 札幌市中央図書館えほん研究会 1986年4月札幌市西岡図書館主催の児童文学講座から、柴村紀代が講師を務め、1994年4月札幌市中央図書館えほん研究会として柴村が講師、その後代表を務めてきた。現在も月一回例会を開き、現在は4年越しの「絵本画家・絵本総リスト」作りに取り組んでいる。
- 2) 『アンケートから見えてきた赤ちゃん絵本 226冊』札幌市中央図書館えほん研究会発行の4冊目の冊子。テーマ別に絵本を選び、3歳未満の赤ちゃんの反応を広範に載せている。編集責任者：柴村紀代
- 3) 鳴門教育大学大学院学校教育専攻幼年発達支援コース修士論文「赤ちゃん絵本の読み聞かせに関する一考察—アンケート調査と事例研究を通して—」 清水貴子 2004年
- 4) NHK教育テレビ「すくすく子育て」2004年10月9日放映 東京大学医学部小児科榊原洋一 談
- 5) 「絵本場面における母親と子どもの対話分析」石崎理恵「発達心理学研究」7-1 1996年8月、4p
- 6) ブックスタート 地域の保健センターで行われる0歳児検診の機会に、すべての赤ちゃんと保護者を対象に、絵本などが入ったブックスタート・バックを手渡す運動。1992年イギリスのバーミンガムで始まり、日本では2001年NPOブックスタート支援センターが設立。2004年9月30日現在、全国710市区町村で実施（北海道は53地域）
- 7) 「『いないいないばー』絵本の一考察」福岡貞子 他 日本保育学会第57回大会発表論文集 122p
- 8) 『2歳児の保育 年齢別保育講座』（1984）高浜介二 他 あゆみ出版
- 9) 「幼児の絵本読み場面における『語り』の発達と登場人物との関係」古屋喜美代「発達心理学研究」7-1 1996年8月 17p

## 参考文献

1. 岡本夏木『子どもとことば』 岩波新書 1982年
2. やまだようこ『ことばの前のことば ことばが生まれるすじみち1』 新曜社 1987年
3. 佐々木宏子『増補 絵本と想像性—三歳まえの子どもにとって絵本とは何か—』 高文堂出版社 1998年
4. 別府 哲『ことばと心の発達 第1巻 赤ちゃんの認識世界』 ミネルヴァ書房 1999年
5. 岩立志津夫・小椋たみ子 『言語発達とその支援』 ミネルヴァ書房 2002年
6. 正高信男『赤ちゃんの認識世界』 ミネルヴァ書房 1999年
7. 岡本夏木・山上雅子 編『意味の形成と発達』 ミネルヴァ書房 2000年
8. 正高信男『0歳児がことばを獲得するとき』 中公新書 1993年